

中国における入唐留学生研究の動向

矢野 建 一

はじめに

入唐留学生として近年もっとも注目を集めたのは井真成墓誌である。この井真成墓誌については、日本だけでなく、中国においても高い関心を集めるとともに、多くの学術雑誌に関連の論文が発表された。墓誌公表の当事者である西北大学の研究者の当初の研究については本誌でも紹介したことがあるので（矢野建一「井真成研究―その後の研究動向によせて―」『専修大学人文科学年報』三七号、付篇1、王維坤「日本における『井真成墓誌』国際シンポジウム」二〇〇七年三月）、ここでは論点の重複を避け、それ以降、発表された研究を以下の論点を中心に概括することとした。なお本来であればこれらの諸点について日本側の研究と比較すべきところであるが、目下組織的な研究整理が行なわれている関係もあり後日を期すこととした。

一、井真成墓誌の研究

王仲殊「井真成と阿倍仲麻呂・吉備真備（井真成与阿倍仲麻呂・吉備真備）」『考古』二〇〇六年第六期、六〇～六

五頁。この論文は二〇〇五年『アジア史学会通信』第三四号に日本語で発表されたあと、修訂をへて、中国語で発表されたものは、井真成が養老元年（七一一）の遣唐使として派遣されたことをうけて、同時に入唐した阿倍仲麻呂と吉備真備も視野に入れつつ、以下の諸問題について述べる。井真成の名前について、阿倍仲麻呂が朝衡という中国名を使っていた例にならって、井上忌寸真成だという説に賛成する。このときの遣唐使は第八次と数えるべきであり、南島路をとったはずである。阿倍仲麻呂を副使とする『新唐書』『日本伝』および『旧唐書』『日本伝』の記事を誤りとする。『旧唐書』『日本伝』に日本の遣唐使が四門学助教の趙玄默に「白亀元年調布」と題する布帛を奉じたところのは、「靈龜元年調布」の誤りである。吉備真備や井真成は太学など国士監所属の学校施設に入った可能性がある。阿倍仲麻呂が宝龜十年（七七九）に亡くなったとするのは『続日本紀』の誤読による。阿倍仲麻呂の唐における最終官位は『続日本後紀』にみえる承和三年（八三六）五月十日の仁明天皇の詔書に準じて、從二品とすべきである。『旧唐書』『日本伝』に「尽」とく文籍を市ひ、海に泛びて還る」という人物は、『新唐書』『日本伝』では栗田真人とするが、唐の書籍を大量に日本にもたらした吉備真備のことと考えられる。井真成の葬儀には、時間的に見て、阿倍仲麻呂と吉備真備らは出席できた。井真成は才能を玄宗皇帝から認められた人物であるが、早死にしたために、歴史にその名が残らなかった。井真成より名望の高かった阿倍仲麻呂の墓誌が出土した場合、その価値は非常に高いので、文化財の保護につとめ、出土文化財の管理に注意すべきである。日本古代の墓誌のうち、天平二年（七三〇）の美努連岡万墓誌だけが中国式の墓誌に相似しており、この人物は大宝二年（七〇二）に入唐しているから、井真成墓誌とともに、遣唐使の墓誌として並べ称すべきである。

井真成墓誌を総括的に論じたものには、ほかに賈麦明・葛継勇「唐代日本人井真成墓誌再探討」（『中国歴史文物』二〇〇五年第五期、三二―三七頁）がある。これは、賈麦明氏が以前発表した「井真成墓誌釈読再探」（『西北大学学报（哲社版）』二〇〇五年第二期）をふまえて再度議論したものである。この論文では、井真成墓誌の釈読のうち、「問道」を「問道」に修正している。また、尚衣奉御の贈位については、皇帝の私的な領域の仕事であり、こうした職位

が日本人に与えられたのは特別な優遇であり、当時の日唐関係の良好さの反映であるとする。墓誌に見える日本の国号については、七一三年二月に埋葬された「徐州刺史杜嗣先墓誌」にも見えるという報告が葉国良氏によってされているが、実物は所在不明であり、それゆえ井真成墓誌が最古の実物資料であると強調する。

井真成墓誌に関しては、同時に王義康・管寧「唐代来華日本人井真成墓誌考辨」『中国歴史文物』二〇〇五年第五期、三八（五四頁）が発表されている。この論文では、井真成墓誌にみえる用語について、他の墓誌の用例をあげており参考になるが、残念ながら日本で同時期に行われた朝日選書の研究が反映されていない。

井真成の入唐時期については、井真成は開元二十二年に亡くなったため、開元五年の遣唐使か、開元二十一年の遣唐使しかありえない。中国の日中関係史研究に主導的役割を果たしてきた王仲殊氏が、上のように七一七年説を採っており、西北大学の王維坤氏も日本の研究者が提示した史料をうけて、七一七年説を提案しているが、異論がない。

吳玉貴「井真成入唐の時期について（井真成来華時間的一点意見）」（西北大学周秦漢唐文化研究中心・三秦出版社『周秦漢唐文化研究』第四輯、二〇〇六年三月、一八一―一八二頁。作者は中国社会科学院歴史研究所研究員）は、その一例である。吳氏は、次の三点から開元二十一年説を主張する。第一に、もし井真成が開元五年に入唐して在唐十七年であるならば、墓誌における彼の経歴はもつと詳しくなければならない。第二に、墓誌にある「豈図強学不倦、聞道未終」は在唐の期間が短いことを意味している。第三に、『大唐六典』卷十八・『旧唐書』卷四十四「職官志」などにみえる、在唐「蕃人」の葬儀に関する記載によれば、十七年も唐に滞在したのなら、唐朝に入籍しているはずで、墓誌に見えるような官吏による葬儀を受けられない、とする。

馬一虹は、「日本遣唐使井真成墓誌に対する中国の学界の研究（中国学界対日本遣唐使井真成墓誌的研究）」（<http://world.people.com.cn/BIG5/8212/51163/51164/3579758.html> 二〇〇五年七月二九日）で、この吳氏の説を紹介した上、同じく開元二十一年説を主張している。二〇〇五年九月までの中国における各説はこの論文に要領よくま

とめられている。それによれば、北京大学の榮新江氏もこの説を支持している。

井真成墓誌の出土は、中国の学界に遣唐使へ注意を向けさせる大きな役割を果たしたといえる。右に例示した呉玉貴氏や榮新江氏は中央アジアと唐の交渉史の研究者として知られてきたが、これを機会に、東アジアへも研究の視野を広げられたことは同慶とすべきであろう。

王小甫「遣唐使からみた古代日本の対外政策の変化（由遣唐使看古代日本対外政策的变化）」（西北大学周秦漢唐文化研究中心・三秦出版社『周秦漢唐文化研究』第四輯、二〇〇六年、一七四―一八〇頁。作者は北京大学教授）もその一つである。この論文では、七世紀における日本の政策が、白村江での敗戦をさかいに、朝鮮半島との外交放棄、耽羅の援助の願いの拒絶、唐との通交、唐風の追求、「小中華」觀念の形成などをあげて、地域政治から内向的な平和的發展に方向転換したことを論じている。この考えの基本は森公章氏の説に依拠している。ただ、王氏が強調したいのは、当時の日本の消極的政策は実質的には鎖国的であり、東北アジアにおける日本の地位を低下させたが、長期の平和をもたらし、それゆえに律令制と独特の文化がこの時期に形成された点である。

二、遣唐使の唐境内における移動と居住

遣唐使が上陸した地点としては、揚州・明州・登州などがあるが、そのうち明州（いまの寧波）の港については、当時の沿岸の考古調査が行われており、それにもとづく論文が発表されている。

林士民「遣唐使は明州のどこに入港したか（日本遣唐使入明州地点考）」（董貽安主編『浙東文化論叢』第二輯、上海古籍出版社、二〇〇四年・一六八―一七七頁）は、日本側の史料を使って、明州に入った遣唐使を個別にとりあげながら、明州のどこの港に、どのような状況で入ったかを考察している。史料としては、円仁の『入唐求法巡礼行記』承和五年十月四日条が明州での様子をよく伝えたものだとし、高く評価している。林氏によれば、考古調査と文献

によつて、唐代における明州の港にはつぎの三カ所の存在が確認できるといふ。①鄞県四明山麓の小渓鎮（現在の鄞江橋鎮）②唐のときの望海鎮（清の乾隆以後には鎮海県城と称された）③姚江・奉化江・甬江の交差点、いわゆる「三江口」（現在の旧市街地）、ここは中唐に県治となり、その後には州治が置かれたことで知られる。このうち、遣唐使が入港したのは③の「三江口」だったとして、つぎの三点を根拠にあげる。一、遣唐使は日本政府の正式な任命のもとに、一部の貢物以外、交易品を携えてきており、帰国時には物品を購入している。この商品の貿易としての側面から見て、「三江口」のような商品が集散する比較的大きな城市が適切である。二、望海鎮②は、唐代においては外来船舶の重要な停泊地だったが、淡水や食料の補給を目的とするのが主であった。遣唐使は入港後に当地の都督府に申し入れをしなければならぬ。この点から見て、望海鎮より三江口の方が適当である。三、三江口は水上交通の要地として長く発展した地点で、唐の文化を摂取するという遣唐使の目的にふさわしい。たとえば、最澄と弟子の義貞は明州府に申し入れをして天台山への旅行許可を得ただけでなく、帰国時には三江口の開元寺法華院において靈光和尚から「軍榮制菩薩壇法」を授かっている。四、第十九次遣唐使は、揚州に上陸したが、帰国時に朝廷からの支給品を明州で授かっている。このような重要な受け渡しには三江口が適当である。このように規定した後、林氏は三江口のどのエリアが具体的な地点だったのか、二説を紹介する。一つは、寧波市内江厦街から東門口あたり。このエリアは唐代において海岸地だった地層であり、中晩唐期の越窑青磁が出土しているし、木材で作られた埠頭の痕跡が見られる。もう一つは、寧波市和義路あたり。ここでは、良質の越窑が大量に出土しており、明らかに遠方との貿易に使っていた。林氏は、後者における出土物の銘文が大中二年（八四八）と比較的晩出なことを考慮して、前者の江厦街から東門口あたりが当時の上陸地ではないかと推定している。

遣唐使は入境した際に、当局の許可を得なければならず、また目的地への移動も許可を得なければならないが、そうした手続きの実際について詳しくはわかっていない。この点は、『入唐求法巡礼行記』に若干の記録があつて貴重であり、程喜霖『唐代過所研究』（中華書局、二〇〇四年）の中で論じている。程氏は円仁の記録のほかに、トルファン

文書などで別の地域における移動の手続きを研究しており、そうした手続きは唐の境域では普遍的であつたろうと考えている。

上陸した遣唐使にはかならず通訳が必要であるが、通訳についてまとめた研究として、馬一虹「古代東アジア漢文化圏各国の交流における使用言語とその諸問題―唐・日本・新羅・渤海を中心に（古代東亜漢文化圏各国交往中使用的語言与相關問題―以唐、日本、新羅和渤海為中心）」『東亜漢文化圏与中国關係』中国社会科学出版社、二〇〇五年十月、九九―一九頁）がある。この論文では、東アジア各国間の外交用語・通訳の設置状況・通訳の出自と養成の三点について、各国の状況を文献実証的に解明している。外交用語としては、唐と日本の間では日本側が用意した通訳による唐語、唐と新羅の間では新羅側が用意した通訳による唐語、渤海と日本の間では通常は唐語、日本と新羅の間でも通常は唐語、渤海と新羅の間では唐語、をそれぞれ使用したとする。また、通訳の設置状況として、『冊府元龜』によれば、唐は「辺州」に訳語官を置いたが（卷九九六）、朝鮮半島や日本から入境する港があつた登州・揚州・明州は「辺州」となつておらず、朝廷による「訳語官」は置かれていなかったとする。つまり、唐朝廷からすれば、通訳が必要なのは朝鮮・日本以外の辺境から來華する者と認識されていたことがわかる。日本では制度的に訳語官は置かれていなかったが、『続日本紀』などの正史に訳語官を置いた記事がある。新羅の史料はないが、日本側の史料から、新羅の遣日本使節団に「通事」「訳語」がいたことが知られる。通訳の出自と養成については、通常は偶然的に通訳できる人物を選ぶのだが、次第に通訳を養成するようになる。唐においては、中央アジアの胡人の言語に通じる者をいわゆる「昭武九姓」の人員から採用したようであるが、東アジアについては通訳の必要性が低かつたために、人員の採用や養成について特別の留意はなかったであろうとする。日本では、朝鮮半島からの渡來系の氏族には唐語に通じる者がおり、彼らが通訳となり、あるいは唐語を教えた。『大宝律令』では、大学寮儒学科に「音博士」が置かれ、唐語の音韻を教授していた。新羅では、唐に語学留学をさせたほか、日本語習得のために日本にも語学留学をさせていた。このように馬氏の説明は非常に周到で、これ以外にも、通訳に対して語学以外に容姿端麗などの要求があつた

ことや、官位が高くなかったこと、など総体的な問題にも言及している。

遣唐使や留学生が上陸後に居住した場所の具体的な状況についてほとんどわかっていないが、留学僧が住した寺院としては、長安の西明寺や青龍寺などが知られている。うち西明寺については、発掘簡報が『考古』一九九〇年第一期（四五～五五頁）に発表されているし、道慈が写してきた西明寺の伽藍配置にならって奈良の大安寺が設計されたのは有名である。これまでの西明寺の研究をまとめたものに、羅小紅「唐長安西明寺考」、『考古与文物』二〇〇六年第二期、七六～八〇頁、羅氏は陝西師範大学歴史文化学院所属）がある。また、留学僧が長安に長期滞在した活動場所として西明寺がどのような文化環境だったかは、李健超「空海、橘逸勢的長安留学」（矢野建一・李浩主編、土屋昌明・普慧編『長安都市文化与朝鮮、日本』三秦出版社、二〇〇六年十二月、一四四～一五六頁）に紹介されている。ここには、玄奘の弟子たる新羅の円測ほか、日本からの留学僧として永忠・空海・円仁・円珍・円載・真如・宗叡・道慈らが滞在した。西明寺から出土した文化財を考慮しつつ、東アジアへの仏教伝播の拠点として西明寺を論じたものに、安家瑤「唐長安西明寺遺址的考古発見」、『唐研究』第六卷、北京大学出版社、三三七～三五二頁）がある。

三、朝鮮半島から唐にわたった人物

唐における留学生には、日本より朝鮮半島からの留学生が圧倒的に多く、ほとんど毎年の派遣となっている。日本の遣唐留学生を研究するためには、朝鮮半島から入唐した者についても考慮すべきであり、そうすることによってはじめて東アジア世界における留学生が総合的に理解される。本来、こうした研究を考えるためには、韓国におけるこの方面の研究をも取り上げるべきであるが、筆者の浅学のために、現状では中国における研究だけにとどめざるを得ない。

この方面でも、もつとも注意すべきは一次史料たる金石文、なかでも新出土史料による研究であろう。

周偉洲「長安子午谷金可記摩崖碑研究」『中華文史論叢』二〇〇六年第一輯、上海古籍出版社、二一八七～三〇二頁）によれば、新羅から開成年間（八三六～八四〇）に入唐した金可記の伝記を書いた摩崖碑が、西安の南、古子午谷北口から出土している。この摩崖碑は、一九八七年六月に西北大学の李之勤教授によって発見されていたが、その重要性が看過されてきたものである。一九九六年以降、韓国の研究者によって非常に注目されるようになったが、中国と日本においてはあまり関心が持たれていない。それは、自然石に掘られた摩崖碑のために、実物資料の観察が容易でなかったからである。周氏は西北大学の周曉陸氏・賈表明氏の協力で拓本をとり、正確な文字を論文に転写している。摩崖碑には、杜甫の「賛元逸人玄壇歌」と五代南唐の沈汾『続仙伝』『金可記伝』が刻されていた。文中に見える諱字などから、周氏はこの刻字を北宋のものと推定している。

陳長安「唐代洛陽の百濟人（唐代洛陽的百濟人）」（洛陽古代芸術館編、趙振華主編『洛陽出土墓誌研究文集』朝華出版社、二〇〇二年三月、三二四～三五三頁）は、百濟王扶余義慈・百濟太子扶余隆・百濟將領黒齒常之・黒齒俊の四人について経歴を紹介する。百濟王扶余義慈は、百濟最後の国王で六四一年に即位、唐の顕慶五年（六六〇）に百濟と新羅の戦いに唐が新羅を助け、百濟王は唐に帰順、洛陽にて詔により赦され、その後、病死して洛陽郊外の北邙山に埋葬された。『旧唐書』『百濟国伝』などにより、その経緯の概略が知れる。『新唐書』『東夷伝』によれば、百濟王の埋葬地は三国呉の孫皓および陳の後主の墓の左だといひ、この配置の記事から陳氏は、航空写真によって邙山鳳凰台村北にその候補地を推定している。百濟太子扶余隆については、墓誌が戦前に盗掘で出土し、現在、河南省開封博物館に所蔵されている。顕慶五年に父王とともに唐に帰順し、洛陽で赦されて、その後、唐に任官すること二十八年に及んだという。永淳元年（六八二）に六十八歳で北邙山に葬られた。百濟將領黒齒常之の墓誌は一九二九年に出土、南京博物院の所蔵。『旧唐書』『新唐書』に伝があり、ほかに「突厥伝」「高宗紀」にも記事がみえる。それによれば、六二九年生まれ、百濟王らとともに唐に帰し、その後、軍人として活躍、永昌年（六八九）に中傷にあつて獄中で自殺、時に年六十。黒齒俊の墓誌も戦前に出土、実物は行方不明となり、拓本だけ残留している。黒齒常之の子で、

上元二年（六七五）に洛陽で生まれた。父に従って吐蕃を討ち、父の死後には冤罪をはらした。これらは留学生の史料ではないが、百済の遺民である点で一連の史料であり、その分析により唐における彼らの生活を詳細に知ることができる。

なお、百済太子扶余隆墓誌と百済将領黒齒常之墓誌には、唐羅百済留守軍と百済復興軍についての記述がみえるが、これに関連する新出史料として「含資道愔管柴將軍精舍草堂之銘」がある（栞根興「韓国新発現的唐『含資道愔管柴將軍精舍草堂之銘』考釈」、『唐研究』第八卷、二〇〇二年、三四七～三五六頁）。栞氏は白村江の戦いをはさむ六四〇年から六九〇年代半ばまでの金石文で、中国境内から出土したものの百件あまりを調査した結果、右の史料の重要性を指摘している（中国境内で出土した朝鮮半島関連の金石文については、栞根興「中国境内和韓国古代史関連の金石文の現状与展望」韓国『新羅文化祭學術論文集』第三輯、東国大学校新羅文化研究所、二〇〇二年一月）。

四、留学生による文化交流の動態

遣唐使や入唐留学生・留学僧による文化交流の研究は、おもに唐の文化が日本や朝鮮に流伝した具体的な経緯を考察することになる。

胡戟「唐鋤の日本流伝および仮名の創製―唐と日本の科学技術・文化交流の一端（唐犁東伝和仮名的創製―唐与日本科技文化交流之一瞥）」『唐研究』第十卷、二〇〇四年十二月、二五七～二六四頁。胡戟氏は陝西師範大学教授）は、唐から日本に伝来したものとして唐鋤と仮名をとりあげて論じる。とくに、平仮名が楷書の偏旁から、片仮名が草書の偏旁から創られたとされる定説に補足して、唐の音曲の譜にみえる符号と仮名が相似している点から、遣唐使で唐から曲譜が日本に伝来したと仮名の創製とに関連があった可能性を主張している。これは、吉備真備や空海といった、入唐経験者と仮名の創製者の伝説が結びつけられていることを想起させる。

張伯偉『文鏡秘府論』と中日漢詩学」（韓昇主編『復旦史学専刊』第一輯「古代中国…東亜世界的内在交流」復旦大学出版社、二〇〇五年十二月、一二八～一四五頁）は、論文の前半で、空海が入唐した際に長安の西明寺に住持したことと、その西明寺が科挙受験生の読書の場所であったことを結びつけて論じている。そして、僧宗叡「新書写請来法門等目錄」の末記に、僧円載が雜書を西明寺で書写した記事があることなどによって、西明寺には内典以外に、詩格類などの外典が作詩のために収蔵されていたであろう、という。空海はそれを学んだのであり、『文鏡秘府論』に引用される王昌齡『詩格』などは直接持ち帰ったものであろう、と推測している。

新羅から入唐した金可記に関する摩崖碑について前述したが、金可記は当時の唐で流行していた道教を深く学んでいた。張沢洪「唐五代時期の道教の東アジア文化圏における伝播（唐五代時期道教在東亜文化圈的伝播）」（韓昇主編『復旦史学専刊』第一輯「古代中国…東亜世界的内在交流」復旦大学出版社、二〇〇五年十二月、一六八～一八四頁）によれば、『海東伝道録』に金可記が道教經典を少なからず習得していた記載があり、道教經典の一切経である『道藏』の朝鮮への流伝は新羅末期の入唐留学生によることを表している、とする。さらに張氏は、唐末に入唐した新羅の崔致遠も取り上げ、道教儀礼のために崔致遠が作文した齋詞や道教を題材とする詩を分析している。

日本や新羅などから唐に影響した文化交流の研究はほとんどないが、外国からの遣唐使が唐人の意識に与えた影響を考察した研究がある。

王賽時「唐代の海洋意識と海洋における活動（唐朝人的海洋意識与海洋活動）」（『唐史論叢』第八輯、杜文玉主編、三秦出版社、二〇〇六年一月、王氏は山東省社会科学院研究員）は、唐代の海洋意識を『全唐詩』『全唐文』を主たる資料として分析している。唐代には、六朝時代以来の海洋に対する畏れを残しながら、貿易を目的とした海洋への進出意欲が興起すること、その海洋への関心は新羅・日本の遣唐使の外的な刺激によると論じている。

まとめ

以上、四点にわたって中国における入唐留学生に関する研究を概括してきたが、井真成墓誌の発見を契機とした日本と中国の研究の進展にはめざましいものがある。しかしすでに指摘されているように、日中交渉史研究という限られた視角からの留学生研究は限界に來ていると言わざるをえない。「古代東アジア世界史と留学生」を提唱した所以もここにあるが、当面は日本の入唐留学生の研究とともに、相対的に史料豊富な新羅などの留学生の活動をさぐる基本データの蒐集とともに、その研究の整理を試みることを課題としたい。

〔付記〕 小稿は共同研究「日本古代における文化情報の伝播と受容」（代表 矢野建一 二〇〇五～二〇〇七年）の研究成果の一部である。